白先勇の LGBT 小説『孽子（げっし）』の東アジア文化界における受容と変容

八木はるな

（中央大学准教授）

白先勇は 1937 年に中国広西省で生を受けた作家・演出家である。台湾文学史では外省人作家の代表として、大陸中国の文学史では、台湾およびアメリカ在住の華人作家として、高い地位を獲得している。『孽子』は、1983 年に台湾で出版された白先勇の唯一の長編小説である。戒厳令下の 1970 年代を舞台に、台北新公園に集まる男性同性愛者の生活を描き通した画期的作品で、今日では現代中国語 LGBT 文学の古典として目されている。

本報告の目標の一つは、白先勇『孽子』がこれまで中国語圏地域でどのように受容されてきたかを分析し、整理することである。そのうえで、東アジア全体で『孽子』はどのように受容されうるかということも、日本での紹介のされ方など手がかりとして考えたい。本報告を通じて、『孽子』の東アジア文学としての意義を少しでも浮かび上がらせられれば、と思う。

『孽子』の受容を整理するにあたって、本報告では特に『孽子』の「変容」、すなわちアダプテーション（翻案）に着目する。文学分野のいわゆるアダプテーションとは、その時々の社会的環境に応じて、オリジナル作品を柔軟に変化させる行為のことをいう。本報告で射程とするのは、その中でも狭義の意味での『孽子』のアダプテーション、すなわちその映画化、戯曲化、テレビドラマ化についてである。台湾を例にとれば、『孽子』はこれまでに 4 回、大きなアダプテーションを経験してきた。初めは 1986 年、台湾ニューシネマの波に乗り、それは映画へと改編された。2 回目は 2003 年で、台湾の公共放送である公共電視が、その連続テレビドラマ版を、ゴールデンタイムのお茶の間に届けた。3 回目は 2014 年で、それはモダンダンスを取り入れた舞台芸術へと昇華された。最後は最近の 2021 年で、『孽子』は 5 年前とは異なる役者を迎え、再び舞台芸術として台湾社会へ発信された。いずれの「変容」にも背景があり、社会には『孽子』が召喚されるだけの理由がある。本報告では、それらを分析しまとめることで、台湾における『孽子』受容の系譜を、とりわけ鮮明に描き出したい。